

コロナ禍と子どもたち

～どうする？ おやじ、大人！～



2023 年おやじ日本全国大会を振り返って

ようやくコロナ禍が収束した今、多くの方々が思い出したくない過去は忘れてしまいたいものです。でも、ここは一旦腰を落として、忘れてはならないことを議論しておきたい、という思いで今回のテーマを取り上げました。最初は、コロナ問題全体を振り返ることも考えたのですが、問題が広範かつ専門的なものですので、おやじ日本の手に負えるものではありません。そこで、コロナ禍での子どもたちの生活に絞って、そこに課題や反省点がないか、今後必ず発生する同種のパンデミックに活かせるものがないかを考えてみることにしたのです。

ですから、この議論には子どもたちの直接の意見が必要でした。6名の中、高生がパネルディスカッションに出てくれ、想定を超えた率直な発言をしてくれたことで、この大会は興味深いものになりました。改めて感謝いたします。

バックン、マックンの事前インタビューは、実にオープンな私生活の公表と言っているもので、彼らの子ども思いな側面に触れることができたことはとても嬉しく思いました。

大字先生、山口先生が子どもたちの話に耳を傾けて、いろいろやりとりをしてくださったのも議論を内容のあるものにしてくれたとありがたく思いました。

おやじ日本の面々、おやじの会のお父さん達にはあまり発言の機会を与えることができず、申し訳ありませんでした。その中でも、子どもたちの成長を願う強い気持ちが汲みとれました。

この大会の様子は、約 150 名の会場での参加者に加え、その後のユーチューブでの視聴者が約 650 名に上るなど、多くの方々にご覧いただけてホッとしております。また、大会の様子を伝えたくれた、NHK と読売新聞には感謝申し上げます。

私たち大人は、子どもは社会の宝である、と言っているが、そのために何を大人ができるのか、しなければならないのか、いつも曖昧にしているように思います。この大会は、その観点からも考えさせられるものになったと思います。

最後になりましたが、この大会の開催にご支援をくださった多くの方々に、心からお礼申し上げます。

どうぞ、この冊子をご活用いただけますように願っております。

2023 年 8 月
認定 NPO 法人おやじ日本理事長 竹花 豊

オープニングインタビュー

パッケンマックン タレント

1997年に共通の知人の紹介で知り合い、パッケンマックンを結成。日米お笑いコンビのパイオニア。結成26年。

「爆笑オンエアバトル」で頭角を現し、「ジャスト」でお茶の間に浸透。現在は情報番組や英語にまつわる教育バラエティをはじめ、テレビやラジオ、イベントで活躍。

2003年にはラスベガスで、2007年にはハリウッドで英語漫才を挑戦。成功をおさめた。講演実績は15年以上。

インタビュアー

竹花 豊 おやじ日本理事長 元東京都副知事

広島県警本部長時代には暴走族問題に取り組み、大きな成果を上げる。東京都副知事に就任後は、「歌舞伎町浄化作戦」の総指揮、都の青少年健全育成条例の改正などを行い、一貫して青少年の非行防止、健全育成に関わっている。現在、地域において学校と連携しながら子どもを育てるおやじの会を支援する「認定特定非営利活動法人おやじ日本」の理事長等を務める。

著書『子どもたちを救おう』（幻冬舎）

竹花 コロナ問題はお二人の子育てにどのような影響がありましたか。

パックン コロナ禍での子どもとのかかわりについては苦しんだ方がたくさんいらっしゃると思いますが、僕はリモートワークが増えて、子どもが家を巣立つ前の貴重な時間を家族で一緒にゆっくり過ごせたことはありがたく思っています。

マックン 娘はいま中学2年で、コロナが始まったのは5年生になる年でした。学校が休みになり、僕は娘と1日約2時間一緒にウォーキングをしました。

竹花 意外にお二人ともいい父親なんですね。

パックン 意外になってどういうことですか。(笑) うちの1年弱リモートだけで授業を受けていました。家庭内の日常が制限されたこともあったし、リモートでは友だちに会った気にもあまりならないし、放課後の部活もまったくないし、そのリモートの期間が子どもも親もとにかくつらかったです。

学校が遠いのですが、近所にも友だちがいたので、室内ではなくて庭に集まったり、公園に行って鬼ごっこをしたり、なるべく同世代の子どもとの交流を保とうと頑張りました。

竹花 頑張ったのは子どもさんですか、パックンですか。

パックン どっちも。僕らは一時期毎日近くの公園で鬼ごっこをしていました。接触はいけないから寸止めで「触った」と言う、そういう鬼ごっこでした。

マクン うちの場合は公立の小学校で、夏休みよりさらに長いお休みがちょうど学年の変わり目に始まり、3年までの復習と4年の予習と両方の課題が出て大変でした。それをこなすために家の中で1時間目、2時間目、休み時間と、学校風の時間割をつくりました。そうすることで、やる意欲が生まれ、習慣化したと思います。

そのときはまだスマホを持たせていなかったので友だちと遊びたいときは、僕が友だちのお父さんに電話して、時間や場所を打ち合わせて、公園や釣り堀で一緒に遊びました。コロナ禍でもその状況を拒否はしないでどうしようか考えて、仕事柄自由な時間があったので、子どもの成長の過程を見られたことはよかったです。

パックン うちの娘は小6から中1・2と3年間で、学業もより真剣な状態になるし、部活ではポジションが決まったり、基本練習をして、中2・3でその花が咲く、その土台づくりの貴重な時期にコロナがやってきたからかわいそうでした。その穴埋めに、たとえば筋トレのレッスンを探したり、習い事を始めたり、そういう働きかけをしました。学校という生活の枠にはめていく、わかりやすいシステムと、親が考えて適当につきはぎでつないだシステムとはできが違う。学校はすばらしいなと改めて思いました。

マクン 僕の場合は、学校が休みだったら、いま家族でできる勉強があつたりすればいいんじゃないかという感じで、あえて学校とはあてはめなかった。山登りに連れて行ったりして、そこですれ違う人と挨拶を交わすことでコミュニケーションが学べる。そして次の日の勉強がは

かどるとか、そういうことを意識しました。

竹花 子どもたちが学校に行けなくて、勉強や生活にどんな影響がありましたか。

パッケン やっぱりデバイスです。子どもは普段から画面が好きなので見せることもあるのですが、朝から晩まで学校のために画面を見る時期は、学校以外の時間は外に出ようよとか、本を読もうよとか言っていたのですが、やっぱり学校の友だちはデバイスでつながっている。手放すわけにはいかないし、ゲームなど使用時間がぐんと増えました。

マッケン もしコロナでなければ、もうちょっと使用量は減ったかもしれないけれども、やっぱり僕も子どもに対してスマホを触っていい時間は少し与えすぎていたかもしれない。

竹花 お子さんのお友だちの中で不登校になったりした子はいますか。

パッケン コロナ禍でどんなに子どもが苦しんだのか。不登校の割合は 2012 年から右肩上がりでした。コロナ禍での学校閉鎖が終わり、やっと行けるとなっても、不登校の子どもは多かった。それはゲームとか TikTok、YouTube といったコンテンツがおもしろくて家にいたいという子どももいるし、オンラインでもいじめを受けて、その人と顔を合わせたくないという子もいるし、ゲームや画面のいろいろな側面で不登校につながっているところに大きな原因もあると思う。

マッケン コロナを機に来なくなってしまったという子もいるし、逆に不登校だったけれど、コロナのあと登校するようになったという子も

身近にもいます。だからいろいろな影響を及ぼしていると思います。うちの子は学校に行きたくないとは一切言っていないし、行けるようになってから毎日が楽しいと。だから学校に求めるものはないかな。

うちの学校はいま部活とか元通りに開放しています。その中でよく見えるのは、先生と生徒のコミュニケーションがすごく取れていることです。先生が本当にうまくやってくれているという印象があります。コロナ期間中でも校庭開放をやりました。校舎には入っちゃダメ、校庭でこの時間からこの時間は遊んでいいということで、娘は校庭開放日に全部行きました。そういう学校もありました。

パクン すばらしい。でも僕は外で遊ぶときはマスクなしに早くしてほしいと思いました。子どもは表情筋をあまり使っていないから、人の顔を見るのも慣れていないし、自分の顔をつくることも練習していないからちょっと心配です。

マクン 去年地域の皆さんが協力して近所の神社のお祭りを復活させてくれたのがよかった。コロナ前より3倍ぐらい集まって、逆に密の状態になってしまいましたが。みんなの表情が明るくて、会話が飛び交って、それを見ているだけで、お祭りが戻ってきてよかったねとみんな思いました。

竹花 子どもたちが参加するイベントをもっと工夫してほしいですね。いろいろなかたちでやれなかったかというのはあるような気がしますね。

パクン 鬼ごっこは3年前の春に始まり、1カ月ぐらいは午後3時

に公園に行けばパッケンと鬼ごっこができるみたいなことで集まるようになって、また明日会おうねというあいさつでお別れした。お父さん、お母さんも少し増えて、換気のいい状態で周りの人と対面式でコミュニケーションが取れる場として、公園はすごくよかったです。

マッケン 近所の公園に毎朝6時半にラジオを持ってくるおじさんがいて、ラジオ体操を大音量で流すんです。コロナのときにみんなが外に出たくて集まってきた。いままで50人ぐらいだったのが、いつの間にか150人ぐらい集まっていました。不思議だったのは、いまの小学生、ラジオ体操を知らない。コロナでラジオ体操を覚えた。

何時に行けばパッケンが来る。6時半に行けばおじさんがラジオ体操を流してくれてみんなで体操する。それで「また明日」と、ちょっとしたコミュニケーションを楽しみにしていたというのがありました。

竹花 お話をありがとうございました。

パッケン 来年は必ず会場にまいりますから。

パネルディスカッション

コーディネーター

竹花 豊（前掲）

パネリスト

山口有紗氏 小児科専門医・子どものこころ専門医・公衆衛生学修士
高校を中退し大学入学資格検定に合格後、立命館大学国際関係学部を卒業、山口大学医学部に編入し、医師免許取得。東京大学医学部附属病院小児科、国立成育医療研究センターこころの診療部などを経て、現在は子どもの虐待防止センターに所属し、地域の児童相談所や一時保護所での相談業務などを行う。国立成育医療研究センターこころの診療部臨床研究員、こども家庭庁アドバイザー。ジョンスホプキンス大学公衆衛生学修士。

大字弘一郎氏 前全国連合小学校長会会長

東京都公立小学校教諭を経て、指導主事として指導行政に入る。渋谷区教育委員会指導室長として人事行政にも携わった後、校長として世田谷区立山野小学校に赴任。現在は同区立下北沢小学校で統括校長を務める。令和3、4年度に全国連合小学校長会長、東京都公立小学校長会長。中央教育審議会委員。等

宇都宮啓 市原市青少年育成ちはら台地区民会議会長

医師だが厚生（労働）省の役人として、岩手県、岡山県、国際機関等にも出向しながら、33年間務めた。元々仕事人間だったが、40代半ばの時に小学校PTA会長にさせられてから人生が一変。地域活動に目覚め、現在は財団や大学などの仕事をしながら、地元地区の青少年育成会議の会長、社会福祉協議会の理事等も務める。

村内 敦 オール世田谷おやじの会会長

第30期世田谷区社会教育委員。世田谷区松丘町会役員。世田谷区を中心に地域活動の重要性を訴え活動する中、オール世田谷おやじの会の活動が東京オリンピックNTTスポンサーのテーマ「希望の光」にふさわしいと評価され、東京オリンピック東京地区聖火ランナーを務める。

石橋昌祐 杉並区立小学校PTA野球連合協議会会長

現在、杉並区小学校PTA野球連合協議会会長。損害保険会社勤務を経て、定年退職後、保険関連会社を起業。

子供が小学校、高校時代に「おやじの会」を立ち上げ、小学校では、夏休みにデイキャンプ・お泊りキャンプを開催、高校では、おやじの会メンバーのお父さん・お母さんによるキャリア授業を企画・開催と子供達と楽しんできました。

佐々木淳氏 前杉並区立和田小学校おやじの会会長

活動開始歴6年目。現役メンバーとして仲間とともにイベントの企画・運営に取り組む。会長時代は杉並区内の他校おやじの会、数校と情報交換やイベント見学を行うなど、交流活動を開始。この繋がりや輪が広がり多くの団体が切磋琢磨して発展出来ることを目指し交流を継続している。

羅 悠飛さん 浅野高等学校1年

中山梨華さん 青山学院高等部2年

石野絢香さん 国立音学大学附属高等学校2年

垣内ひな子さん 香蘭女学校中等科2年

長谷川優貴さん 香蘭女学校中等科3年

中澤悠依子さん 香蘭女学校中等科3年

はじめに

「コロナ禍から学ぶ、子どものウェルビーイング—傷つきとレジリエンスの視点から—」

山口 コロナウィルス感染症は、これまでの多くの研究で子どもたちが重症化することは幸いに少ないのですが、それでも子ども自身の世界や家族・友だち・先生、園・学校・組織、地域社会、あるいはさらに政策や文化、社会環境といったところに間接的に大きな影響を与え、子どもたちのウェルビーイング、心や身体の健康が大きな影響を受けてきました。

私が所属している成育医療研究センターのコロナこども本部が行った全国でオンラインアンケート調査のデータを紹介します。最初のロックダウンのときから 2021 年 12 月まで合計 7 回のアンケート調査で延べ 4 万 5000 人の保護者と子どもの意見を聞いてきました。(p 33)

コロナ禍で、いろいろ新しいこともあって社会が急いで動いていくなかで、ともすると子どもや周りの人たちの声が聞こえにくくなっている状況だったかもしれません。アンケートはただ聞くだけではなくてその結果をまとめて子ども自身に返していったり、学校の先生や養育者などとコミュニケーションしながら、子どもたちにいったい何が起こってきたのだろうということと一緒に考えてきました。

今回は特に心の健康にフォーカスしてお伝えしようと思います。まずストレス症状ですが、私たちは子どもたちにどんなストレス症状があったかを繰り返し聞いてきました。コロナのことを考えるとイヤだ、最近

集中できない、すぐイライラしてしまう、寝付けない・夜目が覚める、
独りぼっちだと感じる、自分が家族を傷つけてしまう等々、子どもたち
がいろいろなストレス症状を感じてきていることがわかりました。子ども
たちは慢性的にずっとそういった状況にあったのかもしれませんが。

心の不調の背景として子どもの声を紹介します。給食中に友だちと話
したら叱られる、運動不足、何でもコロナだからで自分の行動や気持ちを
制限されている気がした、大人は大人でいろいろ大変なのかなと思って
相談しづらくなってしまった、みんな常に笑っているときも心の中で
イライラしている気がした、コロナになって悪口や差別されている人が
いる。こういった中で学校に行きたくなくなった子どももいました。

新しい生活様式の中での疲れを感じる子もいました。学校のコロナ対
策に参加したい。決められたことしかしらないのはおかしい、コロナを理
由になんでも中止にしないでほしい、学校の勉強が難しくても教えても
らえないし時間割も7時間もあってしんどい、友だちと笑い合うことも
部活に取り組むこともさせてもらえず、ちっとも幸せではない、コロナ
の休みでコミュニケーション力が落ちたといった声が挙がっています。

こういった心の不調のときに子どもがだれかに相談できないことも明
らかになりました。子どもたちが相談することについてどう思っている
かと尋ねると、いい助言がもらえなさそう、真剣に聞いてもらえなさそ
う、気持ちを表現できなさそうと考えていて相談することへの期待が低
かったり、表現へのハードルが高いことが見てとれます。

そして子どもたちだけではなくて、学校の先生や保護者など周りの人

たちの心の状況も大切なことです。尋ねてみると、約半分の保護者が心に何かしらの負担があつて、特にすごく心配な状況にあると答えた方もありました。

ここまで子どもたちの心がどれだけ大変だったか、ネガティブなことばかりお話ししましたが、実は子どもたちにはポジティブな力もあることも皆さんご存じだと思います。

レジリエンス、これはとてもつらいことがあっても自分の内外のリソースを周囲と協力しながら利用して自分のいい状態を保つ力のことです。レジリエンスは、決して個人が逆境を跳ね返す力のことではなく、個人がどんなにつらい状況であったとしても周りの人たちが、いかにその人たちに必要なことを一緒に考えるかによってその子のレジリエンスは高まります。私たち一人ひとりがレジリエンスだということです。

そしてアンケートで、ストレスがたまったとき、気持ちがしんどいときにどう対処しているかと尋ねると、いろいろな工夫がありました。周りの人と話す、大人と話をすることも大事なリソースの一つでしたが、子どものことを決めるときに大人たちが子どもの気持ちや考えをよく聞くことが大切な心の支えになりますし、皆さんご存じのように子どもの権利条約ではっきりと自分の大切なことに関して声が聞かれる権利は子どもの基本的な権利として保障されています。

コロナ禍で子どもも大人も、いろいろな中で一人ひとりが頑張ってきました。皆さんが日々の生活の中で少し疲れたなというときにぜひご自身を大切にすることも持っていただけるといいと思います。セルフケア、

それは決して一人で何とかするというのではなくて、皆さんが周りの人に声をかけるように、ぜひご自身にも本当に毎日頑張っているね、だれかを頼っても大丈夫、ありがとうとお伝えいただけたらいいと思います。

竹花 これからは生徒たちのご意見をいろいろお伺いしたいと思います。高校生には私から、中学生には大字先生からいろいろ伺いますので、よろしく願いいたします。

まず高校生の皆さん、あなた自身のコロナ禍での生活はいかがでしたか。

羅 私は中学1年生に入ってから閉鎖的な環境でした。最初のころはこの環境の中でどう勉強すればいいのかもわからないし、どこでストレスを発散すればいいのかもわからなくて漠然とした不安がありました。オンライン授業の中で先生たちと話す機会があって、それで人とのコミュニケーションをすることは、オンラインでもオフラインでもすごく大事であることに気づけたことは、コロナ禍だからこそだったと思っています。

中山 個人的にはコロナ禍でいままでの生活も習慣もすべて壊されたような、いやなことばかりの感じでした。だれが悪いわけでもなく、ウィルスに対応しなければいけない大人もみんな初めてのことで試行錯誤ばかりしていたと思うので、学校の先生方もすごく大変だったと思いますが、でも全然いいイメージはありません。

中学2年の1学期は学校に一切行けず、オンライン授業でもなく、先

生が事前に撮った授業動画で教科書を勉強して、決められた登校日に課題を提出しました。人とかかわることや外に出ることが好きなので、家の中でずっと過ごすのはすごいストレスでしたが、お菓子づくりとか料理とか、学校に行っているときは時間がかかってできなかったことを自粛中にかなりやりました。

音楽に関しては、歌は歌えなかったのですが、私はヴァイオリンなので飛沫を気にせずどこでも弾けましたし、マスクをすればどこでもできたので問題はありませんでした。

石野 私は、音楽の学校に通っていて、合唱部に入っていたので、一切歌ってはいけないとか、管楽器や声楽専攻の子は楽器も吹いてはいけないという状況で、何でこんな制限されなければいけないのだろうと思いました。コンサートも全部なくなり、レッスンもすべてオンラインになり、対面じゃないと先生の言っていることがよくつかめなくて、もどかしい時期がありました。友たちとは電話はしていましたが、直接会ったほうがやっぱり楽しいなという気持ちでした。

竹花 羅さんは、コミュニケーションの大切さに気がついたとおっしゃいましたが、気がついてからどういうコミュニケーションを取ろうとしましたか。

羅 友だちとオンラインゲームをすることが多かったのですが、人の意見を聞くようになれたと思います。自分の話したいことをバーッと言ってしまうタイプですが、俺はこう思うけれどみんなはどう思うかみたいな議論のきっかけもそうですし、人が話してくれることが楽しいなと

思ったので、みんなの意見を聞けるようになりたいと思いました。

竹花 山口先生、何かご質問はありますか。

山口 私たちのアンケートの中でも周りの大人の人たちに自分たちの意見を聞いてもらえた人と、そうではないところでいろいろな決定がされていったという人がいました。皆さんにとって大事なことに関して大人とのコミュニケーションはどんな感じでしたか。

石野 私は逆にコロナに入ってから父母と話す時間が増えて、距離がより縮まったかなと思うのでよかったですと思います。

中山 直接話すときも、マスクをして話すので表情以外のところで、たとえばメールだったら言葉遣いとかテンションに気をつけたり、話すときも声色で喜びとか感情がなるべく伝わるように、コミュニケーション能力は上がったような気がします。大人の方にも自分の意思を伝える能力は少し上がったかなと思います。

羅 コロナ禍で修学旅行とか宿泊行事がすべてなくなりましたが、それは基本的に大人の先生とかが決めて、途中経過とかを僕たちは見れない。なぜこうなってしまったのか、その理由も知りたいし、具体的にどういう議論があつてこういう決断になったのかということをお教えてもらえなかったのは心残りです。

竹花 最後に、皆さん方のご家庭ではパクンマクンみたいに、コロナ禍にある君たちの悩みを解決してあげようと努力をしてくれましたか。

石野 話をよく聞いてくれて、こういうことに悩んでいるとか、大丈夫

夫とか声掛けをしてくれたので、私は多少のストレスはありましたが、ありがたかったと思っています。また規制が解けてからは結構遊びに連れて行ってくれました。

中山 ホームステイ中に母と一緒にお菓子を作ったり、いつもは作らない凝ったものとかを一緒に食べたりしていました。ゴルフは距離が取れる競技なので家族で行きました。

羅 僕はもともと外出するのがすごく好きだったので、たまに母が運動不足になるから外に出ようと言って、少し歩いた距離にある大きい公園や神社に連れて行ってもらえたのは、オンライン授業はすごく窮屈だったのでリフレッシュになりました。

竹花 大字先生、バトンタッチします。

大字 では中学生の皆さん、小学校のころに本当は言いたくても言えなかったことなど、思いっきり言ってください。

中澤 私の場合は小 5 から小 6 に上がるときにコロナになりました。6 年生が一番楽しい学年だと思っていて、移動教室とか運動会の責任者とか、そういうことがやりたかったのですが、全部なくなってしまったり、縮小されてしまったり悲しかったと思います。

長谷川 正直言うと、私は学校がメッチャ好きなわけじゃなかったのですが、休みになったときはメッチャうれしかったのですが、2 週間ぐらい経つと結構毎日刺激もないし、毎日が同じサイクルになって窮屈になって、そのときに日記の宿題を出されて、毎日同じなのに書く必要なくないかとメッチャ思いました。

垣内 私の場合は小学 5 年生に上がるときにコロナが始まりました。最初はオンライン授業ではなくて分散登校で、出席番号順で決められた時間に学校に向かって、プリントをもらって家でやっていました。そうすると友だちとのコミュニケーションも全然取れないし、学校に通っているという感じがなくて長期休みみたいな感覚でした。

大字 おうちの人とはコロナの間どんな話がありましたか。

中澤 新しいクラスの人と仲良くできるかなとか、受験勉強の話もしたり、学校のことをいろいろ話しました。

垣内 いつまで続くんだろうみたいな漠然とした不安を話したりしました。

長谷川 私はちょうど受験の年だったので、親との会話はほぼ受験勉強の話で、あとの会話はあまり覚えていません。楽しかったことは、いままでそこまでネットとか使っていなかったもので、結構探求していました。

大字 もし今度こんなコロナみたいなことが起きたら、学校の先生に何かお願いしたいことはありますか。

中澤 オンラインが動画の配信だったので、やるなら ZOOM とかりアルタイムでみんなと一緒に授業を受けたいと思います。

垣内 私は中澤さんと同じで宿泊行事とか運動会の規模が縮小されたので、そういう行事を小さくしないで、なるべくいままでどおりに進めてもらえるとうれしいと思います。

長谷川 私も中澤さんと同じようにリアルタイムで配信するか、30分

ぐらいあった動画をもっと短くしてほしいかったです。

竹花 山口先生、何か中学生にご質問があればお願いします。

山口 皆さんは心の調子が悪いと感じたことがあったか、周りのお友だちにそういう子がいたか、そういうときにどういうことがあったらよかったか、話していただけますか。

中澤 私は心のストレスをあまり感じていませんでしたが、学校が大好きで、学校に行けなくて、しかも外にもあまり出られないから疲れちゃったという子はいました。

垣内 私自身もストレスはあまり感じなかったのですが、でも生活習慣の乱れとかが自分でもちょっと気になりました。次の日に登校するわけではないので夜更かししてみようかなとどんどん崩れていった感じでした。

長谷川 私はそこまでストレスは感じていなかったのですが、受験勉強で明け暮れていて、集中力が切れることは結構ありました。

山口 皆さんがそれぞれに自分たちや周りに起きていた変化をとらえていることはすごく大切な力だと感じましたが、変化に気づいたときはどうしましたか。

中澤 分散登校のときとか、帰りに一緒に話そうみたいにしていました。

垣内 私は生活習慣が乱れて体力も落ちて運動不足に陥っていたところがあったのですが、YouTube で家族とする体操みたいなものが当時はやっていたので、それに合わせてやっていました。

長谷川 私はあまり覚えていないのですが、兄弟と結構話をしていました。

竹花 大字先生、これまでのパクンマクンの話も含めてお聞きになってどんな感想をお持ちですか。

大字 令和元年度末に、まさに急に学校が休みになったとき、学校も教員も本当にきつかった。学校として本当に何もできなかった。何とか子どもたちが安全に学校に来て、教育活動をして、安全に帰宅させることが最優先で、皆さんの思いや悩みを聞けなかった。6人の話を聞いて、何であのときもっと子どもたちの話を率直に聞けなかったのだろう、みんなの言葉に、みんなの思いにもっともっと耳を傾けることができたのではないかとますますごと思っています。もう一回同じことが起きたら、絶対子どもたちの話をたっぷり聞いて、子どもたちとともに教育活動を考えていきたいと、強く思いました。

竹花 やはり当時はコロナという得体のしれないものの中でみんな不安が大きくて、とにかく安全ということで子どもたちに対する対応も、大人社会そのものの、やはりそちらが中心になってしまったと言えるでしょうか。

大字 言えると思います。学校は非常に難しい。さまざまなことを考えながら、当時はまず安全というところで走っていました。

竹花 さて、後ろに座っている4人の大人たちに順次ご意見を求めたいと思います。

宇都宮 私は厚生労働省で働いた過去があって、最後は感染症の対応

をする責任者だったのですが、私が辞めたあとにコロナがはやり始めました。

私はコロナの流行を第三者として見ることになったのですが、地元では青少年育成会議で活動し、具体的には、地域の二つの中学校と四つの小学校を中心に、未就学児も含めて年間何回かの活動をしています。子どもを相手にしている中で、最初、第一波、二波のころは、感染者数はそれほど多くなく、かつ子どもは感染しにくいとか、感染しても重症化しないという話でした。しかし、要は子どもを介して高齢者に移るといけないからということで一斉休校になってしまいました。私は子どもたちを見ていて非常にかわいそうな気がしました。これも当事者だったら言えないことですが、お年寄りを守ることはもちろん大事なことです、まさにそこで子どもの意見を聞かないで決めてしまった。そこから始まってしまったというのが今回非常に問題があったのではないかと思います。 コロナを怖がるだけではなく、正しく知って正しく怖がる必要があります。実際に私の地元の小中学校も一時期あらゆる活動が中止になってしまいました。

われわれ自身の活動としても、まず屋外のできるのところから始めて少しずつやっています。レジリエンスという言葉がありましたが、まさに個人個人に任せるのではなくて、自分たちで何ができるかを改めて考えさせられたと感じています。

村内 オール世田谷おやじの会の会長をやっています。おやじの会の組織が各小学校にいろいろあって、そういうおやじの会の連携をするこ

とで子どもたちのイベントなどのサポートをしています。

メインのイベントとして、ホールを借りてダンス、吹奏楽、太鼓など子どもたちのいろいろなクラブの発表の場をつくる活動を毎年やっており、このコロナ禍においても一回も中止にしませんでした。最初にコロナが出てきたときもどうやったら開催できるかを考えて、1年目は観客を入れずに動画を撮って YouTube で配信しました。

今後またパンデミックが来るかもしれませんが、オール世田谷としては諦めないでチャレンジすること、どうすればできるかを考えようといま強く思っています。

石橋 私は以前損害保険会社に勤務しており、当時おやじ日本の未来教室を担当していました。保険の仕組みをいろいろ説明して、最後に私は中学生に対して「自ら考え、自ら判断し、自ら行動する」、私はこれを現場力と呼んでいます。その現場力を自分で考えてください、これからの時代は数学のように解答が出るような世界ではなくて、自分で問題をつくって自分で解答を出すということをやっけないと生き残っていきませんよという話をしました。

今回高校生の方、自分なりに考え、工夫をされてこのパンデミックを過ごしてきた。私が言いたいのは、子どもさんですから情報は限られていると思いますが、その中でこの条件だとこんな自由なことができますということを学校や家庭では言えなかったのかと思います。次に大きなことがあったときに、子どもたちが現場力を発揮できるような条件を大人たちが責任を持って出さないといけないと私はこのコロナウイ

ルス禍で自分の反省を込めて感じているところです。

佐々木 私は杉並区立和田小学校のおやじの会に所属し、前年度に会長をしていました。娘が6年生で現役の保護者です。直近3年間、おやじの会に所属しており、私どももコロナによる打撃を受けていました。私どもは子どもたちが学校の授業で体験できないイベントをやっているのですが、そのイベントができなかったことは子どもたちにとってとても残念だったと思います。ただそれが心身に影響があったかという、必ずしもそうとは言い切れないと思っています。一方で別の視点コロナの影響があったと感じました。それは、おやじの会メンバーの活動意欲と連帯感の低下です。活動に参加するメンバーが少ないと、結果、子どもたちを楽しませるイベントが出来にくくなるので、今後、活動意欲や連帯感が増すように取り組む必要があります。幸いなことに今年度の役員がおやじの会が再び盛り上がるように取り組んでいるので、私は嬉しく思います。

コロナ禍でいろいろイベントができなかったのは、正直しょうがなかったと思います。でも今後の考え方としては、0か100かではなくて、やる・やらないの判断ではなくて、どうやったらイベントをできるかというところで知恵を絞り、何とかみんなで工夫してやるのが大事だと思っています。

竹花 皆さん、それぞれご発言をいただきましたが、これからは家庭や学校でもう少しこんなことができたかなということを議論していきたいと思います。まず家庭ですが、いまお聞きした生徒たちの中には、こ

の機会でお父さんやお母さんたちといろいろ話ができただことはよかったというプラスの面をご指摘いただいたこともありました。家庭としてもうちよっと何かできなかつたろうか、パッケンマッケンは頑張っていました、ああいうことをやってほしいと思いませんでしたか。

羅 コロナ禍では、特に初期に学校が閉鎖されていたときは、外に出たいという気持ちが強くて、でも出られない状況の中で自分の中で葛藤はありましたが、やはり自分ではどうしようもできないことを考えたいと、だれかのせいにしても仕方がないので自分が楽しめる環境、自分のために何かできるようなものを見つけていこうという考え方に一定の段階でシフトできたのではないかと思います。最初のころはだれかのせいにしてしまうことが多かったかなと思っていますが、それは親とのコミュニケーションなどもあって、気づかされたことかなと思っています。

垣内 室内で一緒に運動をすることがありましたが、親が家にいると言っても日中はリモートワークをしていて、ずっと解放されていたわけではないので、家の近辺で遊びに行ったりしてほしかったと思います。

竹花 子どもの体力面での成長もすごく大事なことなので、お父さん、お母さんたちがそういうことをもっと工夫したり、考えてもよかったような気がします、いかがですか。

大字 特に休校期間中に学校と保護者をもっと密につなぐ場面はもっとつくったのではないかとと思います。たぶん保護者はものすごく不安で何をしたいかわからない、学校にも制約がかかっていました。

でもそれを超えて、たとえば ZOOM などを活用して、学校側としても運動面ではこんなことができるのではないかとか、心の不安に対してはこういうことができますよというアドバイスができたのではないかと思います。

竹花 何をしてはいけないとはよく言われたけれど、何をしてもいいよとはあまり言われませんでしたね。

中澤 確かに自分からやろうとしなかったり、制限されることが多くて自分からこれをしたいと言えないような状況だったので、親や学校の先生からこういうことはしていいよと言ってもらったほうが楽だったかなと思います。

中山 分散登校が始まったあとも、友だちとしゃべっていると離れなさいとか否定の方向でされてきたので、ほかの交流の方法とか授業内で意見が出しあえるとか、わざわざ学校に行っている意味をコロナ禍の間も提供し続けてくれていたらよかったなと思います。

竹花 山口先生、いろいろ調べておられて大人社会として、家庭でも学校でもこんなことをもうちょっと考えてもよかったのではないかといいことはありますか。

山口 コロナを振り返って、次のパンデミックが起こったときにどうしようかと議論になることが多いのですが、実は今後マスクをどうしていくか、給食をどうしていくか、いますぐできることは結構あるのではないかと思います。大字先生がおっしゃったようにもっと子どもの意見を聞けばよかったと思ったとき、本当に日々の生活とか、次の部活の決

まり事とか、いまある学校の規則や家での過ごし方、たぶん子どもとの対話の中でできることがすごくたくさんあって、それをやっていくことこそ皆さんがおっしゃったことに応える、そしてそれが大人も子どもも大変だったその傷をいやしていくような一つのプロセスなのかもしれないと感じます。

竹花 村内さん、家庭あるいは学校はこんなことをするべきだったのではないかという話はありませんか。

村内 今振り返ると家族との時間、子どもと一緒に何かする時間を意識的にもっとつくるべきだったと反省しています。サラリーマンなのでパクンマクンみたいに一緒にいる時間は取れなかったとは思いますが、通勤の時間がなかった分の時間が生まれたわけだし、自分の人生の中でたかだか3年、その3年間はやっぱり特別な時間だったなと思います。結論はそのとき、そのときに自分は何ができるのかもっと意識的に考えて動けばよかったと思います。

石橋 今回のコロナを数字でざっと見ていると、コロナの感染で亡くなられた方は7万5000人、太平洋戦争、交通事故、ウクライナでの戦争との対比で、この数字には愕然としました。大字先生に言うわけではありませんが、学校はこれだけたくさんの方が亡くなられたことを、いまこの場できちっと教育するべきではないか、人の生の大切さをもっと教えるべきだと思います。

竹花 大字先生、これまでの話を聞いて、いかがですか。

大字 自分の学校の話になりますが、令和2年度、長い休校期間があ

って、いまの中学校 3 年生が小学校 6 年生のとき、学校に行けたのは 6 月明けたぐらいからでした。最初子どもたちはみんなすごくニコニコしていて、学校は楽しい、学校に来られてものすごく嬉しいと思ってくれていると私は思いました。

7 月になって 6 年生のあるお母さんから、うちの子は 6 年間で初めて学校がつまらないと言っていると聞きました。楽しみにしていた 1 年生のお世話ができなくなった、夏の 2 泊 3 日の林間学校が中止になった、秋の運動会、学芸会がどうなるかわからない、友だちと一緒に盛りに上がる学校行事が、本当にやってくれるのかどうかわからなくて、こんな中で 6 年生の大切な時期を過ごすのがいやだと家では言っていると聞きました。

これはまずい。そこで、「制約は工夫で乗り越える。制約を力に」という合言葉をフラッグに掲げて前に進まないといけない。6 年生の子たちに日光の代わりに何をやりたいかアンケートを取り、出た意見を実現していきました。やれるとは思いましたが、学校が踏ん切りをつけて制約は工夫で乗り越えられる、制約を力にして何か言わないと前に進まなかったし、その勢いをくれたのはまさに子どもたちの意見でした。

そういうことをやってよかったと思うところと、先ほどの命のことをちゃんと教えるということもまったくそのとおりで、そのバランスが学校をものすごく苦しめたというのも私は思います。そのはざまに入っただれだけの教員が苦しんで悩んだかというのは、改めてお伝えしておきたいと思います。

竹花 終わりの時間に近づいてきましたが、生徒の皆さん方、あなたたちが大人になって、今度パンデミックが起こったときに子どもたちに向けてどんなことをしてやりたいと思いますか。

羅 僕は休校が明けたときに歴史の先生に言われた言葉がすごく印象に残っています。人間は共通の敵をつくることで連帯意識を高める、それは戦争も同じだけれど、今回のコロナも同じでみんながマイナスのイメージがあるけれども、コロナはいやだったよねというみんな共通のイメージ、認識があるから、休校中何をしていたとか話題づくりにもなるし、大変だったことを分かち合えるのはほかの世代にはなくて、悪いことだけれど、それは不幸中の幸いだと言われました。もし自分の子どもがそういう状況になったとしたら、同じことを言ってあげたいと思います。

竹花 中学生の皆さんはどう考えますか。

中澤 確かに敵に対して自分たちの絆、つながりは強くなると思うけれど、やっぱりいやなものはいやだし、やりたくてもやれない苦しいことには勝てない気はしました。

垣内 私たち人間が共通の敵に対して共同意識を持つことだと思いますが、中澤さんと同じで、確かにいいことはいいことですが、それに対するマイナスの面も結構あるので、慎重に考えていったほうがいいかなと思います。

竹花 何か課題があって、それをできるだけみんなで協力しながら克服していくことが集団としてすごく大事なことだと思いますが、もう一

つ考えてほしいのは、それをどうやって克服するのか、そのために僕らは何をすればいいのかという発想が次に来るのだらうと思います。その問題について、またこれから考えて立派な大人になって、いい子どもを育ててもらいたいと期待します。

時間も徐々に少なくなってきました。専門家の宇都宮さん、パンデミックはこれから本当に起こるのか、それは何年後ぐらいなのか。

宇都宮 歴史を振り返るとだいたい 100 年ごと、50 年ごとにパンデミックみたいなものがありました。周期はわかりませんが、新しい感染症は常に出てきているので、それはまず避けられないと思います。ただコロナで亡くなった方が 7 万 5000 人と一言で言ってしまうますが、実は様々なケースがあるので、正しい知識を持って冷静に分析をしなければいけない。

最初に、飛沫感染というときには 2 メートル以上離れていれば基本的には大丈夫だとか、換気をきちんとするとか、そういうものをまずきちんと理解することが大事です。みんなが怖がるのはコロナの得体が知れないからです。人間は得体の知れないものに過剰反応するという歴史を繰り返してきました。

以前は伝染病予防法で赤痢、コレラなどが指定されていました。でもそれは医学の進歩で全く変わっている。そういうことをきちんと冷静に見ることが一番大事だと思います。学校も含めてなかなか難しいところですが、正しく伝えていかなければなりません。

子どもと大人の 1 年、2 年は違う。子どもの成長に大事な 1 年、2 年

を大人たちがどう考えるか、また子どもたちがどう感じているか、コミュニケーションを取りながら、何とか知恵を使う。「共通の敵がいると連帯する」という話はその通りなのだが、憎むべきは病気であって病気にかかった患者ではない、ということに注意しなければならない。過剰な恐怖で差別をしないで対応するということではないか。おそらく数十年以内にはまたこういうパンデミックはあると思います。そのときに今回の教訓がちゃんと生きているように、生徒の皆さん方もぜひこの記憶、経験をもとにわれわれよりも立派な対応をする大人になることを私は期待しています。

竹花 山口先生、これまでのお話を総合してみると、どんな感想をお持ちでしょうか。

山口 感じたことが二つあります。一つは、人それぞれ考え方、受け止め方にすごく差があることです。今ここにいない子どもたち、熱心な会に集まらないかもしれない大人たち、そういう人たちの声をどういうふうに聞いていけるかがすごく大切なことなのではないかと思います。できるだけたくさんの方から声を集める工夫ができるといいのではないかと思ったのが一つです。

もう一つは、今回社会が子どもの声を聞こうというところに注目が集まっていることはすごくいいことだと思いますが、それが大人目線での聞き方になっていないか、そこを子どもと一緒に相談しながら社会のいい流れをつくっていけるといいと思いました。

大字 コロナが5類になって学校もほぼ平常に戻ってきたこの時期に、

まさに中高生の皆さんの率直なお話、おやじや専門家の先生のお話を聞いて、これからの学校をどうやって充実させていこうか立ち止まって見直すとてもいい機会になったと思います。

コロナのときに私がとても嬉しかったことがありました。それは学校が臨時休校期間中にいろいろな方が訪ねてきてくれました。おやじの会の役員、同窓会の年配の方、PTAの役員も何か力になれることはないかと言って来てくれました。いろいろな立場の方がコロナの期間、何とか子どもたちのために学校を支えようと思って気持ちと力を貸してくれたことを本当に嬉しく思いました。コロナは悪いことではなかった。未来につながるいろいろなことがあの時期を通して生まれたことも改めて思っています。

竹花 皆さん、本当にありがとうございました。拙いコーディネーターではありましたが、今日の話はずいぶん勉強になりました。

感染症ばかりではなくて、たとえば地震などの自然災害の問題も含めて、私どもが社会全体として立ち向かわなければうまく対処できない課題はいろいろあるだろうと思います。そういう課題に社会全体としてどう対処していくのか考えるうえで、非常に大事なことは知識のある人は知識を提供し、その場その場で責任を負っている人はその責任の場で役割を果たす。いろいろな人たちが住んでいる社会ですから、そういう人たちがそれぞれ力を持ち寄って正しい方針のもとに全体で動いていくということがどうしても欠かせない。日本はそういうことに長けた国だろうと思います。

そういう中で日本の社会が忘れざみになるのは、子どもたちのことだったのではないか。おやじ日本ではこれまで、たとえば 18 歳成人にどう対応していけばいいだろう、AI の社会で人間にはどんな力が必要かということも議論してきました。その中で共通している結論みたいなものは、やはり人間が自分の頭で考えて動いていける力を持つこと、そのための教育を子どもたちにしっかりとしていくことが大切です。子どもたちには自分も一人の人間だから自分の意見も聞けよとちゃんと要求できる、そしてその要求をきちっと説明できる力を持つように、大人社会としてちゃんと接していく。そこで初めて社会全体の力がつくれるのだと思います。

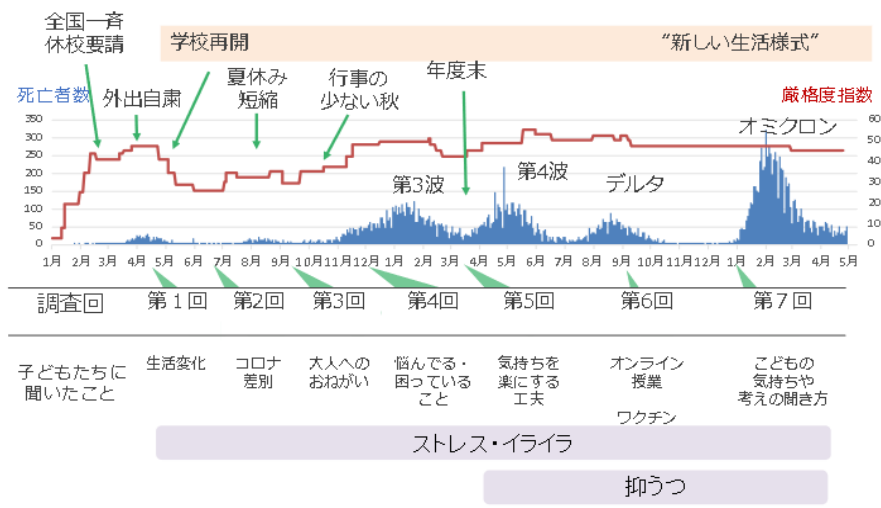
私たち大人は何かあれば主張できるけれど、子どもたちの場合は私たちに保護すべきもの、いわば過保護の精神が抜けきれない。今回のコロナの中でもやはり日本の社会の弱さが一面として表れたのではないか。そこに子どもたちがストレスをためる一因があったのではないかと感じます。

今日出ていただいた生徒たちは大変優秀で、自分の意見を自分の言葉できちんと話ができますが、いろいろなことをだれかに頼らずに自分で考える子どもたちに育っていく、そのように大人が子供たちに接することの大事さを今日もまた学んだように思います。

長時間お付き合いをいただき、ありがとうございました。

2023 年 6 月 25 日（日）

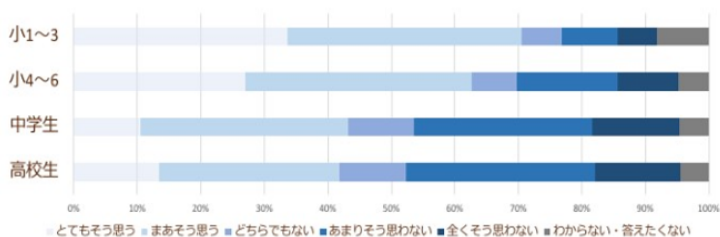
コロナ×こどもアンケート



声を聴かれているか

第2回調査 (子ども; n = 980)

「こどものことを決めるとき、大人たちはこどもの気持ちや考えをよく聞いていると思いますか？」



声を聴かれていないと感じる子どもが多い



出典：国立成育医療研究センターコロナ×こども本部のウェブサイト

おやじ日本のあゆみ

(概略。詳細については当法人紹介パンフレットに記載しております。)

- 2004年
平成16年
- ・おやじ日本設立宣言
 - ・「総監督」に星野仙一氏と野村萬斎氏が就任
 - ・おやじ日本全国大会及びおやじ東京全都大会 6月27日(日)
基調講演 「おやじ、頑張ろう！」 講師：星野仙一氏
パネルディスカッション「おやじ、知ってくれ！」
- 2005年
平成17年
- ・おやじ日本全国大会及び東京全都大会 6月26日(日)
基調講演「気づかせて育てる子どもの力」
講師：山口良治氏(元伏見工業高等学校ラグビー部総監督)
パネルディスカッション
「子どもが安心して、いきいきと育つ地域とは」
- 2006年
平成18年
- ・おやじ日本規約制定
 - ・83運動推進開始 協力：(株)電通CSR室社会貢献部
 - ・おやじ日本全国大会及びおやじ神奈川設立大会 6月11日(日)
全員参加型パネルディスカッション
「子どもと地域の為に、おやじ汗をかこう」
パネルディスカッション「おやじ！知ってくれ～携帯電話
に翻弄されない子どもを育てよう～」
 - ・豊橋おやじネットワーク発足
- 2007年
平成19年
- ・携帯フォーラム・イン千葉
「おやじ！知ってくれ～子どもと携帯～」 3月4日(日)
 - ・おやじ日本全国大会及び千葉おやじネットワーク設立大会
「～広げよう、千葉おやじの輪～」 6月3日(日)
- 2008年
平成20年
- ・おやじ日本発「iS運動」推進開始
「おやじ宣言～立ち上がれ！おやじ」発信
 - ・おやじ日本全国大会及び埼玉おやじネットワーク設立大会
「～広げよう、埼玉おやじの輪～」 6月1日(日)
第1部 「立ち上がれ！おやじ～子どもを守るおやじの輪～」
第2部 パネルディスカッション 「ケータイの今～ケータイは危険？あなたはどうか考える～」
- 2009年
平成21年
- ・特定非営利活動法人おやじ日本設立(2月9日法人登記完了)
 - ・おやじ日本山形発足 4月11日(土)
 - ・特定非営利活動法人おやじ日本設立記念大会 6月7日(日)
「世界のおやじ、日本のおやじ。～語ろうじゃないか、子どもへの思い～」 於：渋谷C. C. Lemonホール
- 2010年
平成22年
- ・おやじ日本しまなみ設立準備会 1月16日(土)
 - ・第7回特定非営利活動法人おやじ日本全国大会
「おやじたちの争点—公教育のあり方をめぐって
(学校五日制、塾、部活etc。)—」 6月20日(日)

- ・おやじ日本広島設立記念大会 7月14日(日)
 - ・第8回特定非営利活動法人おやじ日本全国大会山形大会
11月6日(土) 第一部:講演「育てたように子は育つ」
パネルディスカッション
「未来を開く子供たちをどう育てるか」
 - ・第33回渋谷区くみんの広場参加
- 2011年
平成23年
- ・第9回特定非営利活動法人おやじ日本全国大会
「学校は社会の変化に対応できているか。そして親は…-おやじ
日本の問題提起-」6月5日(日)
 - ・「未来教室」(学校と企業との連携支援)開始 実施校11校
 - ・第2回おやじ日本広島大会
- 2012年
平成24年
- ・第4回愛知おやじサミット in 大口 1月28日(土)
「おやじの子育て-子どもも育つ、おやじも育つ、地域も育つ人
づくり-」
 - ・国税庁長官より認定特定非営利活動法人に認定される。
(認定日6月4日)
 - ・第10回認定特定非営利活動法人全国大会
「「未来教室」へのお誘い~キャリア教育を広げるために~」
6月24日(日)
 - ・「未来教室」(学校と企業との連携支援)実施校21校
 - ・第3回おやじ日本広島大会 11月25日(日)
- 2013年
平成25年
- ・「未来教室」(学校と企業との連携支援) 実施校35校
 - ・第4回おやじ日本広島大会 4月13日(土)
東日本大震災復興チャリティ「千の音色でつなぐ絆」コンサ
ート 於:三滝グリーンチャペル
 - ・創立10周年記念全国大会 6月30日(日)
「広がれ!おやじの輪~語ろう子どもたちと~」
オープニング ヴァイオリン演奏
(東日本大震災復興支援~ヴァイオリン・プロジェクト「千
の音色でつなぐ絆」~津波で流失した陸前高田のマツや建材
から作られたヴァイオリン)
第1部 「広がれ!おやじの輪~おやじの汗に乾杯!~」
おやじ日本広島 「子どもたちに感動を」
豊橋おやじネットワーク「地域へもっと足を運ぼう」
大子自然塾 「自然体験を子どもたちに」
おやじ日本山形「学校へ出かけよう」
おやじ日本「未来教室~学校に社会の風を吹き込もう~」
第2部 「これから ~日本の子どもたち~」
基調講演 ダニエル・カール氏(タレント・山形弁研究者)
総合司会 早川信夫氏(NHK解説委員)
- 2014年
平成26年
- ・第6回おやじ日本広島大会 4月6日(日)
 - ・東京都公立小学校長会意見交換会 5月13日(火)

- ・東京都公立中学校長会意見交換会 5月27日(火)
- ・第12回認定特定非営利活動法人おやじ日本全国大会
「災害国日本の親、おやじに問われていること
～助けられる人から助ける人へ～」 6月29日(日)
- ・世田谷区立等々力小学校おやじの会創立20周年祝賀会
7月20日(日) 於：世田谷区立等々力小学校
- ・千葉県市原市青少年育成ちはら台地区民体験講演会
9月20日(土) 於：ちはら台コミュニティセンター
- ・「未来教室」 実施校53校
- ・「防災教室」 第1回 11月12日(水)
於：渋谷区立原宿外苑中学校

2015年
平成27年

- ・第13回認定特定非営利活動法人おやじ日本全国大会
「スマホと子どもたち～スマホどうする、おやじ！考えよう
じゃないか～」 6月27日(日)
基調講演 「スマホ時代の大人が知っておきたいこと」
講師 竹内和雄氏(兵庫県立大学環境人間学部准教授)
基調講演 「今子どもの心に何がおきているのか」
講師 小野和哉氏(医学博士 東京慈恵会医科大学准教授)
パネルディスカッション
コーディネーター早川信夫氏(NHK解説委員)
パネリスト ダニエル・カール氏(タレント)他
- ・第7回おやじ日本広島大会 フットサル大会 10月25日(日)
- ・「未来教室」 実施校48校
- ・iS運動推進「スマホ安心・安全教室」
- ・防災教室推進

2016年
平成28年

- ・埼玉おやじネットワーク講演会 「スマートフォンが与える青少年への影響と対策」 2月21日(日)
主催：上尾市青少年育成連合会 原市地区会議
- ・第14回認定特定非営利活動法人おやじ日本全国大会
「パラスポーツの未来～結構深いぞ 障がい者スポーツ！～」
6月26日(日)
基調講演 「知っていますか？ パラスポーツ」
講師：仲前信治氏(公益財団法人日本障がい者スポーツ協会
強化部強化支援課課長代理)
デモンストレーション
「ウィルチェアラグビーはおもしろい！」
デモンストレータ 小川仁士氏(「BLITZ」埼玉所属)
パネルディスカッション 「結構深いぞ 障がい者スポーツ」
コーディネーター 竹花 豊(おやじ日本理事長)
パネリスト 田口亜希氏(パラリンピアン・射撃)
小川仁士氏(「BLITZ」埼玉所属)
長谷部健氏(渋谷区長)内田賀文氏(パナソニック株式会社
パラリンピック統括部長)他

- ・豊橋おやじネットワーク おやじフォーラム2016
11月22日(火) 竹花豊理事長講演会
11月23日(祝) 栄おやじの会西居院慰問 廣中顧問お見舞兼
- ・「未来教室」 実施校 49校

2017年
平成29年

- ・「未来教室」実施校 59校
- ・第15回認定特定非営利活動法人おやじ日本全国大会
「パラスポーツの未来Ⅱ～パラスポーツから元気をもらおう!～」6月25日(日) 基調講演 「冬季パラリンピックがやってくる」 講師：大日方邦子氏(日本パラリンピアンズ協会副会長)
デモンストレーション 「やってみよう ボッチャ」
協力 日本ボッチャ協会 都立光明学園生徒
パネルディスカッション 「パラリンピアン大いに語る!」
コーディネーター 早川信夫氏(NHK 解説委員)
パネリスト 上原大祐氏(NPO 法人D-ShiPS32 代表)
大日方邦子氏(日本パラリンピアンズ協会副会長)
ダニエル・カール氏(タレント)
長谷部健氏(渋谷区長)
マクドナルド山本恵理氏(日本財団パラリンピックサポートセンタープロジェクトリーダー・パワーリフティング選手)

2018年
平成30年

- ・第17回認定特定非営利活動法人おやじ日本全国大会
パネルディスカッション「18歳はもう大人!？」6月24日(日)
総合司会 宮本 隆治氏(アナウンサー)
インタビュー 「日本の内と外を語る」
パッケンマクケン(タレント)
小山 裕介氏(コントロール・リクス・グループ(株) 日本総代表兼シニア・パートナー)
マクドナルド山本恵理氏(日本財団パラリンピックサポートセンタープロジェクトリーダー・パワーリフティング選手)
「私たちはこう思う!」 東京都立日比谷高校生
東京芸術大学音楽部附属音楽高等学校生 慶応義塾大学生
「大人たちにも言わせてほしい!」
長谷部健氏(渋谷区長)
武内彰氏(東京都立日比谷高校校長)
長坂敏文(おやじ日本監事 十文字学園女子大学名誉教授) 他
- ・「未来教室」 実施校 59校

2019年
令和元年

- ・認定特定非営利活動法人おやじ日本設立15周年記念大会(第18回全国大会)「さてどうする? 令和のおやじ ～社会の変化とこれからのおやじ～」6月23日(日)
パネルディスカッション「さてどうする? 令和のおやじ～社会の変化とこれからのおやじ～」

司会 三宅 民夫氏 (元NHKエグゼクティブアナウンサー)
 メインスピーカー パックンマックン (タレント)
 長谷部 健氏 (渋谷区長)
 長谷川 真理子氏 (総合研究大学院大学学長)
 竹花 豊 (おやじ日本理事長 元東京都副知事)
 登壇者 エドバーグ・ヤコブ氏
 ノラ・コットマン氏 張 晶子氏 きらら弦楽合奏団メンバー
 オール世田谷おやじの会 横浜市立川和東小おやじの会
 スクール家庭教育振興協会 おやじ日本正会員
 掃除に学ぶ会 杉並区立小学校 PTA 野球連合協議会

・「未来教室」 実施校 58 校

2020年
令和2年

- ・第19回認定特定非営利活動法人おやじ日本全国大会延期
 (コロナ感染拡大の影響の為) オン/オフライン勉強会実施
- ・「未来教室」実施校 10 校

2021年
令和3年

- ・第19回認定特定非営利活動法人おやじ日本全国大会
 (ライブ配信)「AIは人間を幸せにするのか? 子どもたちと
 考える」 6月27日(日)
 基調講演「Aiの“今”と“これから”」
 講師: 西垣通氏 (東京大学名誉教授)
 パネルディスカッション
 コーディネーター 三宅民夫氏 (元 NHK エグゼクティブアナ
 ウンサー) パネリスト西垣通氏 (東京大学名誉教授)
 パックンマックン (タレント)
 長谷川真理子氏 (総合研究大学院大学学長)
 工藤勇一氏 (横浜創英中学・高等学校)
 長谷部健氏 (渋谷区長) 大学生
- ・「未来教室」実施校 30 校

2022年
令和4年

- ・第20回認定特定非営利活動法人おやじ日本全国大会
 (ライブ配信)「子どもに対する大人の責任を果たすために
 ~自信を持った子どもを育てよう~」6月26日(日)
 基調講演 講師: 工藤勇一氏 (横浜創英中学・高等学校長)
 パネルディスカッション
 パネリスト 長谷川真理子氏 (総合研究大学院大学学長)
 工藤勇一氏 (横浜創英中学・高等学校長)
 布村幸彦 (おやじ日本理事・元文部科学省初等中等教育局長)
 村内敦 (おやじ日本理事・オール世田谷おやじの会会長)
 コーディネーター
 竹花豊 (おやじ日本理事長・元東京都副知事)
- ・未来教室 実施校 37 校

- 2023年
令和5年
- ・第21回認定特定非営利活動法人おやじ日本全国区大会
(ライブ配信)
「コロナ禍と子どもたち~どうする? おやじ、大人!~」
6月25日(日)
オープニングインタビュー(ビデオ出演)
パクンマクン(タレント)
インタビュアー 竹花豊(おやじ日本理事長 元東京都副知事)
パネルディスカッション
パネリスト
山口有紗氏(小児科専門医)
大字弘一郎氏(前全国連合小学校長会会長)
宇都宮啓(市原市青少年育成ちはら台地区民会議会会長)
村内敦(オール世田谷おやじの会会長)
石橋昌祐(杉並区立小学校PTA 野球連合協議会会長)
佐々木淳氏(前杉並区立和田小学校おやじの会会長)
羅悠飛さん(浅野高等学校1年)
中山梨華さん(青山学院高等部2年)
石野絢香さん(国立音楽大学付属高等学校2年)
垣内ひな子さん(香蘭女学校中等科2年)
長谷川優貴さん(香蘭女学校中等科3年)
中澤悠依子さん(香蘭女学校中等科3年)
コーディネーター 竹花豊(おやじ日本理事長 元東京都副知事)
 - ・未来教室 実施校5校(7月現在)

【発行】 認定特定非営利活動法人おやじ日本

住所 〒150-0043

東京都渋谷区道玄坂1-2-3 渋谷フクラス17階

電話 050-2017-3231

ホームページ：<http://oyaji-nippon.org/>

E-mail：desk@oyaji-nippon.org

編集 京須和恵 小山洋子

編集協力 小川祐一郎 (株) シップ

本誌記載の内容は全て無断転載を禁じます。